

寅さん歩 その19

バーチャルウォークで

聖火を新国立競技場へ-7



平野 武宏

FWAホームページの「YR・四季の道」に八柳修之さんの「バーチャルウォーク（国内版）沖縄から新国立競技場まで東京オリンピック2020の聖火コース（仮想）1685kmを2020年7月までに歩いてみませんか」が掲載されました。

かつては平野寅次郎の名で映画の寅さんのように全国のウォーキング大会を歩き、世界最大のウォーキング大会 オランダ国際フォーデーズマーチ（4日間で120km）を完歩しましたが、2018年1月に坐骨神経痛を発症し、足の痛みで自由に歩けなくなりました。治療やリハビリを重ね、現在は8~10km程度の散歩まで可能に回復しましたが、歩けない時は例会にも参加出来ず、悶々としていました。こんな時の光明がこのバーチャルウォークの提案でした。リハビリの散歩の距離を累計しバーチャルコースのゴールに向かう、「ゴールするまでは健康でいなければ」との目標を持つ、前向きな気持ちにさせる取り組みです。

先の長いゴールまで歩けるかの不安もありますが、その時は**駕籠に乗って**（ウォーキングの隠語で交通機関を利用）聖火を新国立競技場へ届けようと気楽に考えました。歩く地域について学びながら思いを巡らすのも楽しいですよ。寅次郎は歩きながら、昔、ウォーキングで訪れた通過した県の思い出や、映画「男はつらいよ」で寅さんが通過した県でマドンナと、どんな恋をしていたのかをお話したいと思います。

2018年10月1日沖縄県辺戸岬をスタートした聖火は沖縄県那覇市から鹿児島県、宮崎県、大分県、福岡県を経て、山口県に入り、2019年3月17日現在、スタートから600km地点に到着しました。

「バナナ荷上げ発祥の地 門司」

〔下関名物 ふく〕



九州から
本州へ

⇒



「ふぐ」は下関や北九州などでは「不遇」あるいは「不具」につながるとして縁起を担いで「福」につながる「ふく」と呼んでいます。大阪では「たまに当たる」=「弾に当たる」との洒落で「てっぼう」と呼ぶそうです。

これからは京都羅生門までの山陽道(西国街道) 476km を歩きます。今回は赤間関(下関市)から現在の山陽小野田市、宇部市、山口市、防府市、下松市、周南市までです。生まれも育ちも関東の寅次郎には馴染みの少ない街道なので楽しみです。

〔山口県下関市～山口県周南市〕

601 K m～700 K m



写真上左は関門海峡にかかる関門橋、写真右は周南市の工業地帯です。周南市は 2003 年 4 月平成の大合併で徳山市など 2 市 2 町が新設合併で誕生。周南とは周防国の南部という意味とのこと。周南石油コンビナート(旧徳山石油コンビナート)の夜景は観光スポットです。

寅次郎は山口県をウォーキング大会で 2 回訪問しています。

最初は 2004 年 9 月「第 1 回萩・山口歴史ウォーク」の参加、キャッチフレーズは「萩往還を歩こう!」です。

「萩往還」とは関ヶ原の戦に敗れ萩に築城した毛利輝元が参勤交代のために整備した道です。山陰と山陽を結ぶ街道で流通や経済の発展に大きく寄与しました。また幕末には吉田松陰、高杉晋作、桂小五郎らの維新の志士たちが往来した歴史上で重要な役割を果たした道です。

山越えの険しい道のため徐々に廃道となりましたが、沿線市町村の保存整備が進み、ほぼ元通りの道筋(53 k m)が再現されました。

大会第一日目は萩ステージで石垣と堀の一部が昔の姿を留めている萩城址(指月公園)(写真右)がスタート会場で地元の高校生が長州奇兵隊に扮しての歓迎ぶりです。萩市内の伝統的な白壁・武家屋敷の建物群を過ぎると、だらだらの上り道の連続で、参勤交代の行列がこんな



坂道を上ったのかと感心しました。
駕籠を担ぐ人も乗っている殿様もご苦労様です。
随所に「駕籠建場」と称する藩ご一行の休憩所
(写真右)があり、当時の大変さが良くわかり
ました。



石畳の坂道「一升谷」は一升の煎り豆を食べながら上ると、食べ尽くすと名付けられた長い坂道で山口県境の峠からは一気に下る坂道です。
室町時代は西の京と呼ばれた山口市内に入り、往時の雅な面影を随所に感じながらゴールの亀山公園へ。40Kmコースでしたが、私の万歩計では40Km超、約8時間の山道ウォークでした。

大会第二日目は防府市三田尻への萩往還コース。前日のような上り坂は少ないですが、防府市との境の峠までは上り坂、瀬戸内海の見える峠では、萩往還を踏破した、すがすがしい気持ちで立ちました。

防府市内では防府天満宮(写真右)、毛利氏庭園を通り、三田尻公園がゴール。多くの史跡や伝統文化に触れることが出来た歴史ウォークでした。
長州は近代日本の夜明けを告げた明治維新の胎動の地ですが、関東育ちの寅次郎には気持ち的に距離がありました。でも前夜に市場で出会った親切な地元の人々と接して、それは解消しました。
大会参加者名簿を見ると福島県からは2名のみ
でした。「会津の皆さん！大勢で参加してはいかがですか？」



参加記念品も勤王の志士4名と新撰組3名と一緒に描かれた湯呑でした。

第二回目の訪問は2010年11月「第8回海峡のまち下関歴史ウォーク」で下関です。下関は寅次郎の大好きな坂本龍馬が愛妻お龍と共に過ごし、同志と日本の夜明けを語った龍馬ゆかりの地です。前日の夜はホテルで情報を収集したふく料理・関あじに舌鼓。ホテルでもらった招待券で「海峡ゆめタワー」から夜の街を眺めました。圧倒的に北九州側のネオンが多く輝いていました。タワーには「恋人との聖地」とあると聞き、行くと案内係のおじさんのみで、暇らしく盛んに説明してくれました。おじさん曰く、「若いカップルには邪魔しないで、声をかけるのは子供と中高年だけにしている」とのこと。
大会第一日目は目の前が関門海峡、隣は唐戸市場がある唐戸緑地がスタート・ゴールです。大会の20Kmコース地図上には下関が輩出した多くの著名人が住んでいたとの表示があり驚きました。童謡詩人の金子みすず、作家の松本清張・林芙美子、オペラ歌手の藤原義江、日本初のエンターテナーの二村定一、

大女優の田中絹代、男優の松田優作です。最初のチェックポイントのロープウェイの壇ノ浦駅の眼下は壇ノ浦でバナナと飲料水をいただきました。

以降チェックポイントではバナナの連続サービス。山に入ると平家の落人の地で、平家ゆかりの寅次郎、ご先祖様達の碑に最敬礼。長府毛利家の城下町の白堀とお堀が印象的な街並みから、海岸線まで歩きました。

海岸では源平の戦の像（写真下左）に並んで、海に向かって長州藩の大砲が並んでいます。ゴールの完歩賞もまたバナナ、巖流焼き（どらやき）、マルハのフィッシュソーセージです。ランチは唐戸市場（写真下右）で美味しい海鮮丼をいただきました。



その後は観光パンフを見ながら下関駅周辺を散策。奇兵隊を支えた豪商 白石正一郎旧邸跡、27歳の短い生涯だった高杉晋作終焉の地、安芸の巖島神社の分霊を守護神とした巖島神社を訪ねました。巖島神社には奇兵隊が小倉戦争での戦利品として持ち帰った太太鼓が下がっていました。

大会第二日目、昔は捕鯨船で賑わった下関港から、橋を渡って彦島へ行きました。この日のチェックポイントでもバナナサービス。

目の前は巖流島（写真右）、地元では佐々木小次郎の方を最良にしているように感じられました。

昨日の完歩賞の巖流焼き（どらやき）にも「おそいぞ武蔵」と書かれています。大きな造船所、海峡ゆめ広場から高杉晋作と坂本龍馬が立ち並ぶ「青春交響の塔」を見てゴール。完歩賞は前日とまったく同じで、バナナ、どらやき、マルハのフィッシュソーセージでした。

唐戸市場で選んだ寿司とくじらの唐揚げの昼食を済ませ、北九州空港から帰宅。参加記念品はバッチと萩焼の「ふく」の箸置きです。



映画の寅さんは1986年12月公開の第37作「男はつらいよ 幸せの青い鳥」

（「バーチャルウォークで聖火を新国立競技場へ-6」参照）で山口県萩・下関の祭りに商売で立ち寄っています。商売を終え、「次にどこに行くか」と露天商仲間のコンピュータ占いをすると、「南の方向にすばらしい出会いが待っている」と出て、すぐに北九州筑豊に向かっています。

関東人の寅さんも長州には長居をしていません。

スタートから 700km 地点に到着したら、次の山口県岩国市から広島県広島市のコースを紹介します。途中経過は「寅さん歩」の中でお知らせします。

今回は 官公庁の食堂めぐり-10 台東区役所 です。

平野 寅次郎 拝